

福島民報 2014年9月19日(金)

<http://www.minpo.jp/news/detail/2014082017566>

### 3年で新医療機器実用化 日大工学部と脳神経疾患研究所 共同研究内容発表

先端的医療機器の共同研究開発に取り組む郡山市の日大工学部と脳神経疾患研究所は、大手半導体メーカー「ローム」(本社・京都市)、郡山市に完成予定の県医療機器開発・安全性評価センターと連携し、平成28年度までの3年間で新たな医療機器の実用化を目指す。19日に市内の南東北がん陽子線センターで、同大工学部の出村克宣学部長と酒谷薫次世代工学技術研究センター長、同研究所の渡辺一夫理事長が記者会見して明らかにした。

同大工学部は今春からローム社との共同研究を開始し、ローム社の各種センサー技術を生かした医療機器開発に取り組んでいる。同研究所との共同研究では、このセンサー技術を活用し①脳腫瘍やがんの手術中の適切な診断②心臓バイパスや脳の手術中の血流モニタリング③認知症の早期診断④神経リハビリテーションに役立つ医療機器を共同で研究開発する。総合南東北病院やがん陽子線センターなどを運営する同研究所は、開発した医療機器の臨床・実証を担う。

記者会見で渡辺理事長は「大学、臨床の現場、製造業、研究機関が連携を密にすれば、かなり効果的な医療機器が開発できる」、出村学部長は「長寿社会を支える医療工学技術として研究を進めたい」などと語った。



先端的医療機器の共同研究開発を発表する(左から)渡辺理事長、出村学部長、酒谷センター長

## がんや認知症診断など4テーマに先端医療機器を実用化へ

センサー技術を活用した先端医療機器の共同研究開発に取り組む、総合南東北病院などを運営する脳神経疾患研究所(郡山市、渡辺一夫理事長)と日大工学部(同市、出村克宣学部長)は19日、郡山市で会見した。研究開発や臨床など両者の機能を生かし、がんや認知症診断など4テーマに関する機器の開発を目指す。2016(平成28)年春にも同市に開所する県医療機器開発・安全性評価センターや県内中小企業とも連携して実用化と製品化を進め、県内医療機器関連産業の集積につなげる。



共同研究の内容を説明する(左から)渡辺理事長、出村学部長、酒谷センター長

共同研究では、同学部と連携している半導体メーカー「ローム」(京都)のセンサー技術を用い、手術中に肉眼で確認が難しい腫瘍などを診断、身体への負担を軽減したり、手術中の血流の流れなどを確認できる装置の開発を目指す。また高齢化が進み重要性を増す認知症治療の早期診断が可能となる装置や、神経リハビリテーション法の開発も進める。

開発には、同研究所の臨床現場で効果を実証する。開発した機器は、同評価センターの協力を受けながら承認を受けた上で、地元メーカーなどと連携し製品化を目指す方針だ。

共同研究期間は本年度から16年度までの3年間で、近く正式に契約を結ぶ。

会見には、渡辺理事長と出村学部長、酒谷薫同学部教授・次世代工学技術研究センター長が出席。渡辺理事長は「連携により、郡山で素晴らしい医療開発ができると確信している」と強調。出村学部長は「地方都市にある工学部として、さまざまな形で地域貢献していきたい」と意欲を示した。

(2014年8月20日 福島民友トピックス)

## 脳神経疾患研と日大、先端医療機器を共同開発

総合南東北病院などを運営する郡山市の一般財団法人脳神経疾患研究所（渡辺一夫理事長）と、同市の日大工学部（出村克宣学部長）は19日、センサー技術を用いた先端医療機器の共同開発に取り組むと発表した。医工連携で効率的に開発を進め、がんや認知症治療に役立てる。

開発分野は（1）がん診断（2）手術中の血流代謝モニタリング（3）認知症の診断・治療（4）脳の機能再生を図る神経リハビリテーションの4つ。期間は本年度から2016年度までの3カ年で、近く両者が契約を取り交わす。

日大は半導体大手「ローム」（京都市）と共同研究を進めており、今回の共同開発計画では同社の特殊センサー技術を活用する。がん診断機器の開発では、肉眼では確認できない脳腫瘍などをセンサーで特定することが狙い。的確な手術が可能となり、体への負担が最小限に抑えられる。

病院を運営する脳神経疾患研究所は開発した医療機器の臨床研究を担い、効果を検証する。15年度に郡山市内に開所予定の福島県医療機器開発・安全性評価センター（仮称）と連携して、実用化につなげる計画だ。

同研究所であった記者会見で、渡辺理事長は「緊密な医工連携により、素晴らしい医療機器が開発できると確信している」と強調。出村学部長も「医療工学をキーワードにさまざまな研究を進めている。長寿社会をサポートしていけるよう、技術を活用していきたい」と展望を述べた。

### 3年で新医療機器実用化 日大工学部と脳神経疾患研究所

福島民報 8月20日(水)11時47分配信

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20140820-00000015-fminpo-l07>

先端的医療機器の共同研究開発に取り組む福島県郡山市の日大工学部と脳神経疾患研究所は、大手半導体メーカー「ローム」（本社・京都市）、郡山市に完成予定の県医療機器開発・安全性評価センターと連携し、平成28年度までの3年間で新たな医療機器の実用化を目指す。19日に市内の南東北がん陽子線センターで、同大工学部の出村克宣学部長と酒谷薫次世代工学技術研究センター長、同研究所の渡辺一夫理事長が記者会見して明らかにした。

同大工学部は今春からローム社との共同研究を開始し、ローム社の各種センサー技術を生かした医療機器開発に取り組んでいる。同研究所との共同研究では、このセンサー技術を活用し、  
A 脳腫瘍やがんの手術中の適切な診断  
B 心臓バイパスや脳の手術中の血流モニタリング  
C 認知症の早期診断  
D 神経リハビリテーションに役立つ医療機器を共同で研究開発する。総合南東北病院やがん陽子線センターなどを運営する同研究所は、開発した医療機器の臨床・実証を担う。

記者会見で渡辺理事長は「大学、臨床の現場、製造業、研究機関が連携を密にすれば、かなり効果的な医療機器が開発できる」、出村学部長は「長寿社会を支える医療工学技術として研究を進めたい」などと語った。